# 養蚕業

中村史子

養蚕および絹文化はアジアの文化の古層のひとつである。中国では約4750年前から絹織物が生産され、金にも劣らぬ貴重品として国を超えて売買されてきた。日本でもまた、養蚕は古代より重視されてきている。

しかし、養蚕と絹の文化は、単線的かつ硬直化した「国の伝統文化」への回収を拒む存在でもある。そもそも、日本の蚕種は大陸から伝わったものと考えられている。加えて、日本の養蚕業は近代化を遂げる過程で、ヨーロッパ式の製糸技術の多大な影響も受けている。富国強兵、殖産興業のキャッチフレーズのもとで、養蚕と製糸の文化もまた国家体制の中へと組み込まれていった。

これら養蚕や絹をめぐる異質な文化や資本の介入は、日本に限らずアジア各所で見て取れる。タイ・シルクを復興させ世界に発信したのは、アメリカの元軍人の実業家、ジム・トンプソンである。また、内戦により途絶えかけていたカンボジアの絹産業は、日本人染織家、森本喜久男によって再開された。

こうして複数のファクターが絹を織り上げているわけだが、さらに、人の存在無くしては生きられない家畜である蚕は、人と人以外の生物との関係について改めて考察させる。加えて、養蚕業がしばしば女性性と結び付けられてきた点も、興味深い。

そのため、現在では、伝統的な養蚕・染織の継承や保存に努めるだけではなく、より批評的視座を持って養蚕、絹をモチーフとして扱うコンテンポラリーアーティストも多数存在している。

遠藤薫《Handkerchief/Silk fabric/Thailand/1945》2019年、愛知県美術館蔵

遠藤薫《Handkerchief/Silk fabric/Thailand/1945》の制作過程

## 関連リンク

- 遠藤薫 《Thanks, Jim Thompson》シリーズ、バンコクビエンナーレでの記録動画、2018年 https://youtu.be/gUcA5vR-wQg